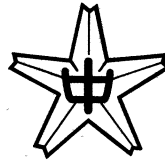
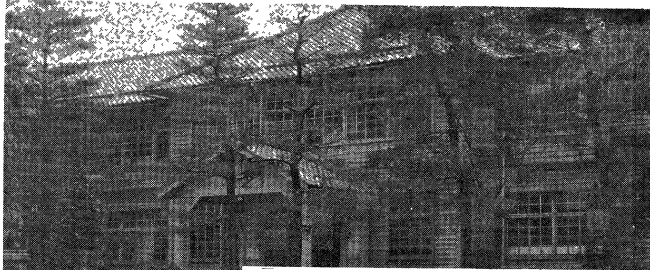
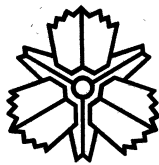
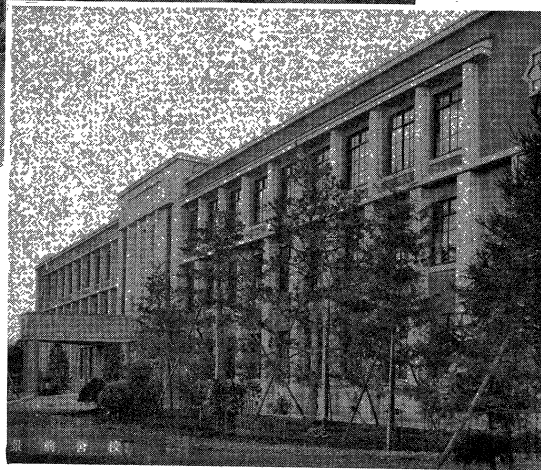


歴史と伝統にかがやく旧一中校舎と現泉丘高校々舎



一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211



『一泉』の発刊に際して



一泉同窓会々長
宮 太郎
(二 中五十一回卒)

旧金沢一中が第一回

の卒業生を出したのが

明治二十七年であり、

当時の卒業生は僅かに

三名でした。爾後毎年

その卒業生の数も増加

し、明治四十一年、第

十五回の卒業生を以て

九百二十二名、約一千

名を数うるに至ったの

で、一中同窓会を組織

する議がおこり、同年

八月二日に創立総会を

行ったと聞いておりま

す。

以降昭和二十三年三

月、学制改革により第

二学年修了生を最後の

会員として、母校金沢

一中は終了しました。

その後は新制の金沢泉丘高校が発

足し、昭和二十九年の卒業生まで泉

丘同窓会を結成していたのでありま

すが、当時の泉丘同窓会の会長であ
った山本外吉校長より、両同窓会の
深い因縁に思いを致たされ、更に同
校の将来にも意をよせられ、両同窓
会を合併し、互に旧情を温め、且つ
は又泉丘高校の健全な発展に寄与あ
らんことを申し出られました。

これを機に翌三十年二月、「一泉
同窓会」が新たに発足することにな
ったのであります。

本多の森に対する憧憬、泉ヶ原の
白亜の校舎への愛着等々、時代的に
は夫々ズレはあるが凡て八十余年に
わたる母校の歴史を誇る思い出深い
ものとして私達の脳裡に深くきさま
れ、忘れることの出来ないものであ
ります。

吾々の植えた常盤木は幹も枝もス
クスク伸び緑の色の濃さも、これか
ら一きわ冴えてくることでしょう。

一万八千余の会員各位が環境を同
じくし、感激を共にした母校を中心
として、意気相投じ、大同団結し、
在校時代の青春の闘志を以て自らの
職域に敢闘して、一方母校の今後の
発展に関心を寄せられることをお願
い申します。

みなさん益々のご健闘をお祈り
します。

「一泉」発刊によせて



現泉丘校長
大 高 彰 八

基本設計の段階にまで作業が進んでいると聞いております。

「七十年史」によりますと、「ここに鉄筋三階建ての白亜の殿堂は当時の学校建築の粋を集めて地黄煎原頭に巍然として聳え、その偉容は四隣を圧する壮観さを呈した。」とあります。新しい校舎も、徒らに新奇を衒うのでなく、質実堅牢、高校校舎建築としてそれにふさわしいものであつてほしいと願つております。勿論、立派に成長した多くの樹木は、できるだけ残し、碑や像も、勿論だて、と考えておりますが、それにもまして、本校八十有余年の歴史の中で、同窓の各位が、良き師、良き友と力をあわせて、培い、築きあげられた伝統を受けついで行くことこそ、やがて九十年を迎える時に當つている私たちの、最も心すべきことと思つております。

この「一泉」を通して、同窓会の各位の方が、懐旧の思いをはせたり、旧交をあたためたりされること、ひいては、母校を偲ぶよすがともなれば幸と思つて、近況をつづり思つていらっしゃる一端を述べました。各位の御健勝と御活躍を心からお祈りして、つたない文を終わります。

ある日、同窓会事務局長の西多さんから、「今度「一泉」を出すことに決つたので、何か書いてほしい」とのご依頼がありました。私は、生まれた土地も、卒業した小・中学校も石川県ではありませんし、本校へ赴任しましたのも昨年3月からにすぎません。

雑 感



元泉丘校長
張 江 啓
(二・中三十九回卒)

この度は同窓会の会報を発刊する運びになつた由、御同慶にたえませぬ。市内のいくつかの高校の同窓会でも、既に会報や機関誌を発行して、いるところがあつて、本校でも発刊の企画が望まれていただけに喜ばしい。年に一回の総会では、細かい点にまで触れる時間も少なく話題に不足することもあります。会報は会員全員に配布することは無理としても各期の会合や総会で同窓会の動きを知らせるよすがにもなり、話題の材料にもなるだけに更に同窓会の動きも活発になることでしょう。

* * *

同窓会の活動がなかなか活発にならぬことを歎く声を聞きますが、学校を卒業してから同窓会に関心を持つまでにはかなりの歳月が必要なものだ。同級、同期の集いは横のつながりであるから、同窓会の縦の動きとは違つたものです。横のつながりは早くから持たれるものですが、更に上下へも広がりを求める時期までにはなお時間をかけねばなりません。

社会に出である程度の安定を持つまで関心を持たないこともありま。横のつながりの人達の数が少なくなつて縦へとつながりを求める人もあります。

横の動きはそのグループの人にはつかみやすいが、前後の時期の人にはつかみ難いものです。会報は横の関係を縦の關係に結びつける役目をするものだと思います。

* * *

私達の同期のグループは昭和七年卒業を基準にしているので七桜会と称しています。毎年地元を中心に会合を重ねて、そのうち数年毎に全国大会を開いています。昭和五十六年には卒業五十周年の全国大会開催を計画しました。名簿の整備も概ね終り、通信費の確保によつて連絡の緊密を図つていくつもりです。

六桜会も同年に開催の計画を持つておられるようです。こうした同期会が同窓会の基盤になるものだと思います。会報がこれらをつなぐものになることを願っています。



(金沢工大講師)

